



特定非営利活動法人
アーシヤ

アジアの農民と歩む会

会報
73号

マキノスクールの稲刈り



11月6日、稲刈りをするアラハバード有機農業組合とマキノスクールの学生とスタッフ。朝食後、朝の集会（左下）で「何故有機農業か」という話をシェアする農場主任のサントシュ（右下）





スタディツアーとインターンシップ研修について考える

アーシャ理事・東京農工大学講師
及川 洋征

今日の学生たちには、気軽に海外で学べる機会がいろいろとあります。コロナ禍の期間は中止あるいはオンラインプログラムとなったものの、国内の多くの大学では海外の協定校への短期留学プログラムや語学研修プログラムなどが再開されております。これら短期留学・語学研修には、機会があれば参加したいと考えている学生は私の周囲に一定数居ります。一方、本格的な留学や海外への就職を考える、いわゆる海外志向の学生は少数派です。どちらにしても大国インドに関心を寄せる学生は、私の身近には見出すことができずにおります。（一定数の学生は、早い段階から卒業後の就職先を意識し、むしろ民間企業によるインターンシップ研修に関心を持っているようです。）

アーシャのようなNPOや、HISなど旅行代理店による様々な国へのスタディツアーやインターンシップ研修も学生の学外活動の選択肢として期待するところです。ただし、参加には相応の費用負担が求められますので、目的意識を持って（アルバイト、奨学金、助成金、父兄の支援等により）資金を用意できる学生の数は限られると思われる。企画を安定的に実施していく側としては、現役の大学生に限らず、自己資金をもつ社会人や定年退

職したシニアの方々を勧誘していくとよいのかもしれませんが。いずれにしても、何らかの目的意識を持っている方々を、数多くの選択肢の中からアーシャの企画に引き付け、活動に巻き込んでいくための（広報などの）何らかの工夫が要りそうです。

大学で担当する授業では、アーシャの活動と企画を視覚的かつコンパクトに紹介する広報資料があるとよいと思いました。アーシャが取り組んでいるインドと日本国内でのさまざまな事業活動の全体像を一枚の概念図（ポンチ絵）にまとめるとどんな絵が描けるでしょうか。そこに、スタディツアーやインターンシップ研修はどのように位置付けられ、参加者と現地それぞれにどのような効果が期待できるでしょうか。

私が想像したのは、インドでの現地活動である有機農業、女性支援（保健、縫製）、そして農村人材育成といった活動の柱が、束となって自立している姿です。柱の束が多少の揺れにも倒れずに上に伸びていけるよう、日本からの支援活動の支柱が柱の束を周囲から支えています。この概念図の柱は苗木に、柱の束は木立と置き換えてみてもよいかもしれません。そうすると、スタディツアーの参加者は、外から飛来しアーシャの木々の果実を一時ついでみ種子を遠くに運んでくれる鳥たちとして描けそうです。インターンシップの参加者は、一定期間木立に滞在し、果実が多く実るよう受粉を手伝ってくれる養蜂農家として描けるかもしれません。すると会員の皆さまには（蜂蜜のような甘い）特典が付くでしょうか！

NPO法人アーシャによる企画事業参加者募集

インドスタディツアー

2024年3月3日（日）～3月12日（火）

本会プロジェクトと近隣の農村を訪問します

旅行代金： ¥250,000/1人

（オプションの経費は別途）

経費に含まれるもの：渡航費、滞在費、食費、

インド国内交通費、通訳代、観光費

催行：参加者6名以上。成田空港集合・解散

当会理事が成田空港から同行します。

観光：バナラシ、サルナート、デリー等

インターンシップ研修

学生が対象(デリー空港集合・解散)

マキノスクールのスタッフ、組合、女性縫製スタッフとの協働作業や調査、発表等行います

2024年3月3日（日）～3月17日（日）

旅行代金： ¥120,000/1人

● 経費に含まれるもの：滞在費、食費、研修費、インドでの交通費

● 含まれないもの：渡航費、ビザ代、海外保険代、観光宿泊費及び拝観料（バナラシ等）



元インド派遣スタッフは今

アーシャでの4年間を振り返って

北海道家庭学校職員・元インド派遣スタッフ

平野 伸吾

【今の私】

私は2016年から2020年までの4年間、アーシャのスタッフとしてインド：アラバードに現地駐在員としてお仕事をさせていただきました。現在は北海道オホーツク地域遠軽町にありまず児童自立支援施設「北海道家庭学校」で仕事をしています。この児童自立支援施設というのは、ざっくりいうと社会や地域において問題行動を起こしたり、生きづらさを感じている子たちを施設で預かり、共に成長していくところです。子どもたちの大半は家庭環境や地域との不和、自身の障害、偏った人生経験（観）が複雑に絡み合い、問題行動を起こしてしまう背景が彼らにはあります。そんな私たちの施設は北海道の大自然の中で、夫婦で寮舎を持ち、作業や勉強、施設内での様々な行事を通して多くの経験を積み「育ち直し」をしていく現場となっています。



家庭学校の運動会。筆者

【アーシャと私】

先述した児童福祉業界に飛び込むきっかけになったのも、直前まで働かせていただいていたアーシャでの経験が大きな転機となっています。当時、20代半ばであった私は国際協力の現場に憧れ、インド：アラバードの地に行くことを決めました。その時から毎日のように異世界のカルチャーショックを受けながら、刺激的な日々を過ごしてきました。

主に私の仕事はAOAC（アラバード有機農業組合）が主でした。農村に行き生産を把握しながら、お客様（主に日本人駐在者）に向けて販売をする営業活動を同時に行っていました。生産者と消費者の苦悩や想いを汲み取りつつ、両者の生活を最大限支える「通過点」として私が仕事をしていたことが何より幸せでした。特に農村のインド人も日本人駐在の人たちも過酷な環境という中で家族を思う気持ちは一緒であることを、仕事を通じて感じさせてもらいました。

またもう一つ印象的な仕事として日本の若者を対象にしたインターンシッププログラムもあります。自分がイ

ンドに来たのも学生時代の海外経験があったからこそでした。だからこそ自信と誇りを持てるアーシャで若者たちに自分なりの恩返しと次世代育成に取り組めたのは大きな喜びとなりました。



2018年9月に行われたインターンシッププログラムの参加者と筆者（最前列）。彼がこのプログラムをマキノスクールに提案し、プログラム責任者となって実行。

【今へとつながる】

そんなインドでの様々な経験を通じて、感謝・愛情・育成の重要性を深く学んだ私が次に舞台を移したのは日本の児童福祉業界でした。日本では児童虐待による悲しい事件が相次いでいます。インドの農村では貧困の中でも、協力し合い、愛され、元気に育つ子どもたちがいる一方で、日本のこの現状に辛さを感じ、帰国後今の職に至りました。

今では子どもたちと共に畑を耕し、イベントがあれば収穫した野菜でインドカレーを作ることもあります。子どもたちの成長をみて、インドとはまた違う価値観や幸せを感じる時があります。

インドが教えてくれたことはたくさんあります。でも一貫して言えるのはあの時（インド）の経験が、今でも常に色々なことを教えてくれているような気がします。



家庭学校の学校祭でインド料理を紹介する平野夫妻



農村開発と人材育成



インドの農村は今 ～農家も都市消費者も一緒に～ 三浦 照男

篤農家の子どもに対する期待は？

「あなたの息子が大きくなったらどんな仕事についてもらいたいですか？」と長年付き合っている青年篤農家、アンスマンさんに訊ねてみました。彼は有機農業組合栽培農家で、幼少の男女2人の子どもの父親です。「公務員になって欲しいが、それが叶わなかったら農家を継いでもらいたい」という答えが返ってきました。彼のコーストは下層に属しますが、農業者としては珍しく理系の大学を卒業し、その後、5ヘクタールの土地を両親そして弟夫婦と共に耕しています。その農地の一部を有機農法に転換し、10年程前よりアラハバード有機農業組合のメンバーとなり農産物を出荷しています。

私たちの組合は主に小規模農民（2ヘクタール以下）のために設立しましたので、彼のような中規模農民には勧誘をしませんでした。しかし、「是非組合の仲間に加えて欲しい」とアンスマンさんから何度も懇願に根負けし、組合理事が彼の加入を認めたのでした。近隣の農家に比べ資金もあり、勤勉でチャレンジ精神に富む彼を取り込むことで、他のメンバーのよい刺激になるかもしれないという期待もあったのです。実際、組合が推奨する環境循環型合鴨稲作同時作（福岡県の有機農家・古野隆雄氏が提唱）を率先して受け入れ、立派な収穫量を上げ、他の栽培農家をリードしてくれました。このような革新的で有能な青年篤農家でさえ、子どもには平均的インド人同様「公務員が一番」とすんなり言うのです。彼から「農業」という言葉を期待した私は愕然とした気分となりました。日本同様労働はきつい割に、報酬が少ないのが現状です。更に、肉体的にきつい伝統的な人力による農業が一般的なのです。

躍進するインド政府のイメージづくりと現状

「世界最大の人口」で更なる注目を集めるインド。14億がインド全土を覆っています。その6割、約8億人が農村に住んでいるのです。日本の全人口の6.5倍です。この膨大な農村住民の中身に関する議論は影を潜め、「急速な発展を遂げるIT産業、グローバルサウスのリーダーとしての躍進するインド」というイメージをメディアはこぞって取り上げています。更に数年後には日本のGDPを

追い越し世界第三の経済大国となる・・・華やかなストーリーがインドのみならず世界を駆け回っています。このようなポジティブな報道は農村の隅々まで浸透していて、現政権を好意的に考えている農村の人々も少なくありません。「インドの民間企業が月に純国産のロケットを打ち上げて、鉱物を持ち帰った」と大国として自慢げに話すのです。確かにそれは大きな偉業であると思いますが、農業や農村開発を専門とする教授でさえインドの農村の内情、現状について、またそれらの課題と解決に関する研究の話をあまりしません。品種や論文のための栽培方法の研究はしているようですが、「もう少し農村に軸足を置いた政策や議論ができないものか」と思ってしまう。先に述べたようにインドには8億もの農村人口が現存し、更にその数と農村部の割合は膨らみ続けているのが現状です。この人々が農村での生活を諦め、都市へと流れ込めばどうなるのだろうかと心配になります。

もっと魅力のある農村にするには

では、小規模農家が農村で希望と誇りを持って生活できる環境とはどうしたらよいのだろうか？様々な思案が脳裏を駆け巡ります。一般的に、インド人は自国の伝統文化に強烈な誇りを持っています。先般のG20の国際会議等でも、インドのモディ首相はいつもインドの伝統服着用です。インド独立の父・マハトマガンジー同様、欧米、中国、ロシアとは違うということアピールしているようです。それはインドが経済大国として、或いはグローバルサウスのリーダーとしての自信を持っていることの現れだとも思います。

しかしながら、先に述べたようにその伝統文化の源となっている農村の課題についての議論を深く踏み込んできません。農村は都市部に比べ社会変化は緩慢ですが、それでも農村の社会環境は確実に変容してきています。農村住民がその文化を誇りとし、また農業を誇りとする農業者の育成、そのための教育活動、そして政府や支援団体からの協力が必要なのです。そのためにも、都市部の消費者と農村部の生産者との直接的なネットワーク構築がより必要となっています。生産者がつくる健康な食べものを消費者が食べることによって、農業への感謝を消費者がより強く持つことができるのです。また、この感謝によって生産者は自己の農業により自信と誇りを持つことができるでしょう。それらの為の支援を今後ともアジアは続けていきたいと考えています。



SCSADのための山岳地帯に研修旅行

SCSADの学生とマキノスクールスタッフ2名が1週間の研修旅行
(デリー、グルガオン、ウツタルカンド州の村) 往復約2000Kmの旅

10月12日～19日



デリー郊外の新興都市・グルガオンのメトロ駅で(写真左)

同市で健康食品を扱う『HASORA』を訪問。オーナーの八田姉妹(右奥)から有機農産物の動向について学ぶ(写真右)



U.K.州の州都デラドゥン市(標高600m)にあるOrganic Shop『KIWI』を視察。同市在住の竹内かおりさんが案内役を(写真左)

宿泊先のゲストハウスで今までの学びを振り返る(写真右)



有機篤農家のバグチャン氏(写真左から3番目)らがやっている有機農産物の直接販売所を視察見学。新鮮野菜の他に、穀類、手作り加工食品も販売している(写真右)



有機栽培認定農家バグチャンさんの村マチガオン(標高1300m)はデラドゥンから車で2時間半、彼の家に2泊させていただいた。彼は同村の仲間の有機栽培を助けている。現在、3名から農産物を買上げ直接販売所で販売している。
同村の有機栽培農家に質問するSCSADの学生達(手前)



カブラニ村(ムスリー:標高2200m)にあるローカルNGO・MGVSを訪問、責任者・スレンダー・シン(左から1番目)からMGVSの農村開発活動について学ぶ。また、農村の女学生に対する啓発活動をZoomを通して、農村で活動している女性推進員らに訊く。



農村を豊かにする支援

ウィンターギフトシーズンに想う

アーシャ代表・三浦 孝子

今年も冬がやってきました。日本はインドと同じ気候になってしまったのかと思うほど、今までの夏と異なる暑さ、秋になっても真夏日と言われていましたが、やはり冬は訪れ、ストーブや炬燵がうれしい季節になりました。



クリスマスの12月が近づくと、どこもかしこもギフト商戦です。ギフトシーズンには、大切な人に何を贈ろうかと思悩むのは、楽しく、素敵なおことかもしれません。人と人がつながり、大切な人に想いを馳せて何かを選んだりできる喜びを与えられているからです。どなたにも、これまでに受け取ったギフトの中に、思い出だけで、心があたたまる素敵なお品がおありでしょう。1冊の絵本、おもちゃ、お人形、時計、ペン、帽子、マフラー、お洋服、手作りのお菓子・・・

今年のウィンターギフトはもうお決まりでしょうか？

コロナ感染拡大でロックダウンがインド全土に広がった2020年春、フライトも列車もキャンセルされてしまい帰国できなくなった私を、バラナシに滞在されていた日本人音楽家グループの皆さんが、ピックアップしてくださり、おかげで、注文を受けていた展示会用縫製品を詰め込んだスーツケースを携え、無事に帰国できました。音楽家の皆さんと空港近くのホテルで数日間一緒に、インド伝統音楽の演奏や歌を聴かせていただきました。

グループの中に、演奏家でありながら、同時にインドの布の素晴らしさを生かした手作りバッグなどを制作される女性がいらっしゃいました。大きなタンブーラ（シタールに似たインド楽器）と裁縫道具一式と旅していらっしゃるのです。上質なインド綿の布を使った美しい作品に「素晴らしい！」と言うことしかできませんでした。加えて、ご自分で縫った洋服を着用、インド綿は、肌に気持ちよく、長く愛用できると話してくれました。

この時の出会いから、アーシャの支援している縫製事業でも、バッグ、ヘアアクセサリー、エプロンだけにとどまらず衣服もとり入れたいと思うようになりました。とはいえ、インド綿なら、どんな生地でもよいわけではな

く、どんなデザインでもよいわけではありません。お客様から、買ってよかったと思っただけのような良質な生地を使い、丁寧な縫製をすることが求められます。インドでの生地選びは、簡単ではありません。綿100%を探しているのに、口達者な店員が化繊混じりの生地を綿100%だと自信たっぷりに買わせようとします。日本人の私が騙されるだけでなく、インド人スタッフでさえ、騙されてしまうのです。

今では、生地の見分け方をマスターし、目利きとなったAVSSの女性たちが選んでくれるので、良質な高級インド綿の生地を入手できるようになりました。縫製技術も向上し、スカート、チュニック、ヨガパンツまで定番商品に加わりました。良質なインド綿、着るほどに身体になじみ、夏は涼しく、冬は肌着やスパッツなどと組み合わせることで温かい服になります。

ギャザースカートはふんわりし過ぎないように、タックを入れる工夫が施され、すっきりしたデザインに改良しました。ヨガパンツは、ウエストのシャーリングの練習を重ねてきれいに縫えるようになりました。男性の方々も着用しても、気持ちよいと言っただけの定番商品となっています。

ウィンターギフトの「Aセット」では、ヨガパンツか、スカートを選び、お気に入りの生地を指定してオーダーメイドで縫製してもらうこともできる設定です。クリスマスに間に合わないかもしれませんが、「ギフト券」をお渡しして、ワクワクしながら楽しみに待っていただくというのも、素敵ではないでしょうか？

大切な方へのプレゼントに、がんばっている自分へのご褒美に、北インド農村女性が心を込めて縫製した洋服と、マキノスクールの有機農場で栽培されたモリンガパウダーとのセットを、ぜひお試しください。皆様のご支援が北インド農村女性の雇用支援というギフトにつながります。



縫製作業が大好きだというカピタさん



農村女性の自立のために

紆余曲折を経てたどり着いた場所

～縫製活動を通じた農村女性達の歩み～

川口 景子

AVSS（アーシャ開発奉仕協会）は縫製技術や保健の知識を学び、自分の能力を活かして社会に貢献、収入を得たい農村女性達が、安心して働き、自信の能力を向上させることができるようにと設立されたインド活動地のNGOです。現在は縫製を通じた活動に特化して活動を続けています。今年3月から実質金銭的な支援なしで活動を続けています。今回は、インド農村女性の自立支援として、縫製活動を通して農村女性たちが取り組んできた課題と成長の歩みを整理し、現在にどのような橋渡しがされてきたかをお話したいと思います。



自立のための出発地点の課題

AVSSで働く女性の殆どは、活動に参加するまで縫製経験がなく、外に出て働いたことがない女性達ばかりでした。そういった農村女性たちが外に出て、自分のカースト外の人と一緒に仕事をすることは新しい世界で自分を確立するための挑戦となります。また外部者から騙されることがよく起こる農村では懐疑的になりやすいため、一緒に働く人達の信頼関係の構築が最初に直面する壁でした。二番目の課題は技術的な側面です。農村部で販売されている縫製品は、縫製が雑でも売られおり、それが標準になっていたため、まずはそれを認識し、技術を習得を目指す姿勢を持つことでした。最後の課題はマーケティングで、買い手の方に欲しいと思ってもらえる商品を作り、数ある選択肢の中から選んでもらうための取り組みを農村女性自身が少なくとも現地で行えるようになることでした。

農村女性の成長の歩みとその鍵

適材適所という言葉がある通り、活動を通してどの女性がどの役割につくか、適性や能力、意志を見極めることが、まずは大事な一歩となります。若い未婚女性がリーダーだった時は、メンバーに強く言えずまとまりがとれませんでした。決してダメなリーダーではなかったのですが、その後年上で貫禄のある既婚者アヌに交代したところ、フェアな精神を保ちつつ、誰とでも信頼関係を築き、時に厳しく叱責することができるスーパーバ

イザーとしての姿は、その後のAVSSの成長をけん引する要因となったと思います。

また、技術的向上については、基準に達するまで合格判定を出さず、買い手の要望に応えるまで改善を妥協せず継続し、忍耐強く製作を待ったことで、門戸を閉ざさず長い期間おつきあいくださった買い手の方達、日本人スタッフやインターンの貢献がありました。縫製員は妥協を許さない環境で何度も不可能と思えた技術的な壁を乗り越えてきました。現在の技術リーダーのプラティチは来た当初は技術的にも上手とは言えず、新しいデザインを研究するのも苦痛の様子でしたが、今では一番手の縫製員として後輩を育て、商品開発もしています。

マーケティングについては、「**サンプルを見てもらう → 要望を聞く → 既存のデザインを修正・改善 → 見せる（何度かやりとり） → 注文確定**」という基本的な流れを、自分たちで買い手の方達と繰り返し行ったことで体得してきたことです。心を開いて会話を楽しみ関係を作っていくことができきています。「お店や都会の人と話すのが恥ずかしい。街に行くのが怖い。」と女性たちが言っていた頃がもはや懐かしいです。こうしてできることを増やしてきた農村女性達には、担当分野を任せ、責任感と達成感の両方を感じられるように支えることがスタッフの役割になっていくと思います。

つながりと信頼関係で発展していく今後の見通し

現在、上記の活動が長年の実績によって、社会的意義のある活動として認められ、ヨガパンツなどのエスニックパンツの開発を栃木県のフィンランドの森・ヨガ教室と共同開発を続けています。また、インドの首都圏でもお土産市場が復活し、新しい取扱店が増えました。現地の地元でも大学農学部や病院からバッグの大量注文が入ってきています。これから解決しなければならない課題は多くありますが、多くの買い手の皆さんに育てていただいていることを支えに、明日も彼女たちが笑顔で働けるようにサポートしていきたいと思っています。



新作パンツとAVSSメンバー達（右からアヌ、プラティチ、アチャ）

アーシャ事務局便り



✿ あなたの想いを世界へ、あなたのご寄付でアーシャの活動を支援してください。

アジア生協協力基金活動報告会



9月7日(木)、公益財団法人 生協総合研究所が主催するアジア生協協力基金 活動報告会が開催された。この基金ではアジアの人々が協同の力で社会的・経済的自立を目指す活動への助成・支援を行っている。今回、2022年度に助成を終了した当会を含む2組織から詳細な活動報告が行われた。

https://ccij.jp/jyosei/kikinkoubo230925_01.html

当会は、2019年度から2022年度まで助成を受け、「北インド農村女性の自立のための手工芸品マーケティングシステムの確立と生産・技術能力向上事業」を実施した。当会が支援してきた農村女性のNGO・アーシャ ビカス セワ サミティ(AVSS)の縫製活動が自立運営できるようになり、農村女性の活躍と学び・連帯・収入確保の場ができることで社会的地位が向上することを目指した。インドでも2020年3月からコロナ感染が急拡大し、2020年度事業は1年延期、マーケティング等の活動は方針変更を余儀なくされた。2021年度以降、感染予防を徹底して活動した結果、現在では注文額は2018年度の153%増加、上級技術を習得した女性が増え、日本やデリー向け商品製作で多忙を極めている。

本報告では、三浦孝子代表理事よりアーシャ事業全般、現地よりオンライン参加した川口景子インド事務局長より活動内容と成果を報告した。AVSSの縫製員たちも感謝を意を表した。



会員のご継続とクリスマス募金のお願い

当会の活動は会員の皆様の会費とご寄付に支えられています。皆様よりご支援・ご協力をいただき、2023年度事業計画に沿って活動を継続しています。心より感謝申し上げます。2024年度の活動を発展・強化するため、引き続き、会員のご継続と会費のご納付をお願い申し上げます。年会費は3月末までにご納付ください。ご寄付、クリスマス募金もご協力ください。よろしく願いいたします。

<http://ashaasia.org/shien1/>

ネットショップ「ASHA STORE」ではハンディクラフトやモリンガなどのフェアトレード商品の販売に加えて、会費、ご寄付、募金の納付も扱っています。ぜひご利用ください。

<https://ashaasia.stores.jp/>



事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。 2023.8.13～2023.11.15 順不同、敬称略
誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

一般寄付 【福島県】佐藤耕士* 【栃木県】大浦智子* 【埼玉県】奥紀久子 【神奈川県】Blissful Blue
【インド】アラハバード有機農業組合*、デリー日本人会ボランティアグループ*
指定寄付 【東京都】日本キリスト教団全国教会婦人会連合*
《お詫び》*付きの方は前号で記載漏れがございました。大変、失礼いたしました。

- 会費 個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円
個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円
- 郵便振替 加入者名：アーシャ＝アジアの農民と歩む会 口座番号：00160-0-315147

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力で深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会

☆この会報は日本で製作・印刷しています☆

<事務局・交流センター> 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17 TEL: 0287-47-7840 FAX: 0287-47-7841
事務局 丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: <http://www.ashaasia.org>